

第6回板井原訪問 訪問日 10月13日(土)

今日は花かご祭りの日です。
板井原は秋になりもみじの葉
が秋の色になってきました。



花かごを背負う人の衣装を地元の人が着せています。

久しぶりなのでやり方を忘れてしまったなあとのことでした。

花かごを背負う人は本来25歳以下の若者でなければならないそうですが、板井原集落には高齢者の方しかおられないため、今年は本来の姿に戻せたと喜んでおられました。



衣装が完成しました
とてもよく似合っています



花籠を背負って村を回ります。
これが本来のやり方です。若
者がいなかったため、これま
では行われていませんでした。



神社の階段です。
足元に注意しながら登ります。

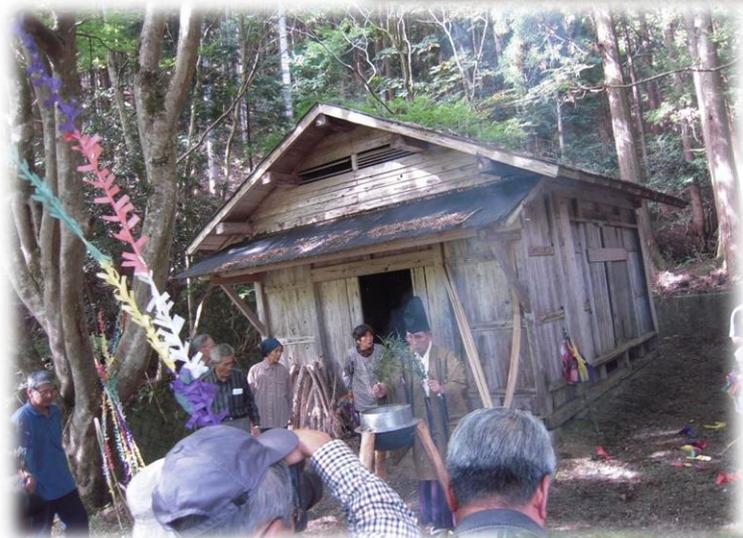
境内に着くと、アマチ
ュアカメラマンが大勢
いました。

この時期は板井原に
最も多くの観光客が訪
れるそうです。

花籠祭りの本来の意
味は、この年の収穫を祝
う祭りです。



神主さんにお祓いを受けました。そのあとで花かごの飾りを来てくれた人に配りました。



神主さんが来ている人全員にお祓いをして、お祭りは終了しました。

向山神社の入口にある幟「のぼり」を見ました。



住民の平尾さんのお話によると、この幟「のぼり」は他の神社と違う特徴があるとのこと。

板井原地区には鳥取市で最も格式の高い神社である宇倍神社の倉の鍵があり、板井原の人がこの鍵を持っていかないと、宇倍神社の祭りは始まらないのだそうです。

また、幟のデザインとして、他の神社では黒地に白い文字が入っているのにこの神社は白地に黒い文字が入っています。



模様も特徴です。幟の先端には花びらが16枚ある菊の紋章があります。この幟は昭和5年に作られていますが、戦前に菊の紋章を付けることを許された神社はとて格式が高いとのことだそうです。菊の隣には、これも皇室と縁が深い桐の紋章がついています。どうもこの神社には、他の地域の神社とは違った何かがありそうですが、住民の方も謂われをご存知なく、それについては謎のままです。

このあとお祭りのごちそうをいただき、昔の祭りの様子や、神社の由来についてのお話を伺った後、板井原をあとにしました。

(感想) 初めての花かご祭りの手伝いは大変でした。特に花かごを支えながら神社の階段を上るのが大変でした。大変

でも多くの人達に見て喜んでもらえてうれしかったです。AK

初めて花かごをかついで思ったことはただ一つ、重かった！！・・・です。
でも板井原集落の人々といっぱい話のできたのでよかったです。TY

初めてお祭りに参加して楽しかったです。写真を撮る観光客の人たちもたくさんいてビックリしました。いつもとは違う人にも関わることができて良かったです。RS

とても伝統的な祭りでした。楽しく参加できて、写真も撮れたのでよかったです。KN

他の集落の花籠祭りに来るのは初めてだったのでおもしろかったです。DF

板井原集落は謎に満ちています。なぜ、これほどの奥まった地域に人が入り込んだのか？人里離れた地に住むのは、人との交流を断つことが目的となります。そうすると平家の落人伝説が信ぴょう性を帯びてきますが、どうもその事実はないようです。また、板井原地区の世話役をされている原田巖さんのお宅が、江戸時代からこの地の名主（庄屋）だったそうですが、この地とは単に板井原集落だけではなく、そこから高低差にして 300m も下った千代川沿いの市瀬地区も含まれています。板井原がなぜ広い地域の有力者になっていたのでしょうか。さらに、年に一度のお祭りに登場する幟旗。白地の旗印に、天皇家の象徴である 16 枚の菊の紋章、さらに皇室・朝廷に関わりの深い「五七桐」が描かれていたり他の地区の幟とは明らかに違った特徴を持っています。また、因幡一宮である宇倍神社の蔵の鍵が、これだけ隔絶された板井原集落に保管されていた意味とは何なののでしょうか。歴史家でなくても、興味を掻き立てられます。

しかし、この謎に満ちた伝統を受け継ぐ収穫祭は 5 家族のみで運営されていました。村最大の行事にしては、さみしさは否めません。若者がいなくなっからは、正式な段取りを踏めないままにお祭りが運営されていたそうです。生徒がその若者の役割を演じることで、昔の賑やかだった祭りの雰囲気蘇ってきたのでしょうか。「今年は格別」という言葉に、生徒たち共々に確かな手応えを実感することができました。

この取り組みが朝日新聞の鳥取版（10 月 22 日付け）に紹介されました。当初は小さな写真とベタ記事を想像していたのですが、掲載されたのは花籠祭りの様子をうまく切り取った写真入の大きな記事でした。記者の方が住民、生徒に丁寧取材をされ、最後は幟旗を下ろす作業にも手伝いされたとか。後日には本校に来校され、1 時間以上も生徒の活動について熱心に取材をされていきました。板井原集落の歴史の重み、住民不在ながらも維持されている村祭り、そしてその地域に関わっている高校生の活動が記者の琴線に触れたのではないかと思います。高校生が活動に参加することで、板井原集落がメディアに取り上げられることは、この活動が狙っている目的の一つです。高校生としてどのような関わりをしていったらよいかの一つの答えが出ました。（顧問）

活動が新聞記事になりました。

朝日新聞鳥取版 平成 24 年 10 月 22 日

花籠

高齢化する住民たちが細々と続けてきた智頭町市瀬の板井原集落の秋祭りが、県立智頭農林高校の生徒たちの協力でにぎわいを取り戻した。祭りの主役も高校生。地元の人たちは「今年は格別だった」と喜んだ。

花盛り

智頭農林高生お手伝い

秋祭りは、竹ひごに色紙を巻き付けて飾った「花籠」を板井原の向山神社に奉納し、農作物収穫に感謝する。毎年10月の第2土曜にあり、今年は13日、智頭農林高生6人も参加。1年の山根泰貴君(15)が白い服の上からふんどしを巻き、約10kgの花籠を背負って家々をまわった。

花籠の重さでうしろに倒れないよう、警護と呼ばれる4人の付き添いと共に神社まで歩いた山根君は「花籠が重かったけど、集落の人と話せて楽しかった」。偶然居合わせた岡山県からのアマチュア写真家グループは「ええもん見られたわ」と言いながらシャッターをきった。

板井原は県選定伝統的建造物群保存地区に指定されているが、ここで生活するのは2世帯だけ。市街地に移り住み、日中に畑仕事などで来る10世帯ほどの「通い住民」が、水道掃除や祭りの準備に加わって集落を維持している。

住民は高齢者ばかり。秋祭りの花籠は、かつては25歳までの青年が背負って家々をまわっていたが、ここ数年は該当者がいなかった。高校生の参加で祭りに活気が戻り、住民の藤原年彦さん(79)は「あれだけお宮

板井原秋祭り「今年は格別」



智頭農林高校の生徒が花籠を背負って神社への階段をのぼった。智頭町の向山神社

に大勢の人があがることはなかった。近年にないにぎわいになった」と顔をほころばせた。

地域学習がきっかけ

智頭農林高は、ボランティア委員会の活動で今年4月から板井原に通い、地域学習を重ねてきた。祭りは見学する予定だったが、1週間前に花籠作りを手伝った際に住民から「背負ってみないか」と提案され、応じた。

生徒たちは6回の訪問で、トンネルを通らず集落までの道を歩いた

り、廃村になった下板井原の見学をしたりした。住む人が減っていく集落の姿に「後継ぎがいなくなってしまうのはいけないと思う。PRする」「板井原の人の手伝いをしてあげたい」などと感想を記した。

ボランティア委で生徒を指導する岸本智志教頭(56)は「限界集落をも超えた板井原を、どう維持していくのか。大人にも答えの分からない問題を生徒が住民とかかわりながら考え、自ら動くことを期待したい」。今後、住民からの聞き取りを記録に残す活動も計画している。(村井七緒子)